

手術室におけるクリニカルパス導入後の効果

手術部

○西川 知佐 西岡 香織 吉本 舞

1. はじめに

クリニカルパス（以下パス）は現在、多くの医療現場に浸透し、使用されている。A大学手術部でも「患者の安全」「記録時間の短縮」「ケアの質の保証」「実施記録」を目標とし、平成17年3月に眼科手術の看護記録にパスを導入した。以後、各科手術に関するパス作成が進み、平成20年3月現在、使用パスは45種類にのぼる。そこで、パス導入後3年経過した現在、その効果を評価するために今回の研究に取り組んだ。

2. 対象と方法

研究の目的・内容を説明し同意の得られたA大学手術部看護師18名を対象とし、パスに関するアンケート調査を行った。データ収集方法は、質問紙にて、パス導入後「良かったこと」「悪かったこと」を記述してもらい、データ分析方法はKJ法を用いた。

3. 結果

分析の結果、パスの効果としてのカテゴリーは「記録時間の短縮」「業務の効率化」「安全管理」「質の保証」「業務の流れの理解」「精神的余裕が得られる」の6つが、また、今後取り組むべき課題としては「バリエーションの捉え方、発生時の対応の難しさ」「用紙、システムに対する問題点や改善点がある」「個別性がみえない」「慣れない」「個人によって理解の差がある」「病棟での継続看護に活かしきれていない」の6つが挙げられた。

4. 考察

効果として最も多く挙げられたのが「記録時間の短縮」である。これにより、患者ケア、手術介助など他業務を行える時間が増え、「業務の効率化」さらには「精神的余裕」にも繋がった。特に短時間の手術では、患者在室時間に比べ記録業務が多いことが問題であったが、パスによりスムーズな介助が可能となった。

また、記述的記録減少やチェックボックス使用により「業務の流れの理解」が容易になり、記録漏れ・ミス、観察漏れ、情報の伝達漏れの防止に繋がり、より患者の「安全管理」が図れるようになった。さらに、経験年数に関わらずケアや記録の統一ができ、看護における「質の保証」の維持が可能となったなど、今までの文献とほぼ同様の効果が得られた。しかし、個別性の不明瞭化や、バリエーションの捉え方・対応の難しさなどの問題点もみつかった。

5. 結論

パス導入による効果として、手術業務の改善に繋がる6つの有用性が挙げられ、パス導入が有意義であることの確認ができた。一方、効果と共に挙げられた6つの課題を参考に、今後、パスの内容や利用法を再検討するべきであると考えた。

〔平成20年10月10・11日 第22回日本手術看護学会年次大会（徳島）にて発表〕